

2018年度 萌芽的公募研究 研究プロジェクト申請書

研究代表者	氏名	龍溪 章雄	所属	龍谷大学・文学部・真宗学科
			職名	教授
研究課題	日本語	高輪仏教大学の研究		
	英語	A Study on Takanawa Bukkyō University		

研究目的／研究期間内に何をどこまで明らかにする予定なのか1年目、2年目に分け、明記してください。

1年目

高輪仏教大学は龍谷大学の前身校の一つであり、明治35年(1902)4月に東京高輪に開設された学校である。高輪仏教大学については『龍谷大学三百年史』(1939年)、『龍谷大学三百五十年史』通史編上巻(2000年)をはじめ、龍溪章雄「高輪仏教大学廃止反対運動」関係史料の再考—『教界時事』の史料的価値の再確認と反対運動の実態解明—(『真宗学』第111/112合併号、2005年)などの研究がある。そこでは明治35年の高輪仏教大学の成立から明治37年の廃止へと至る過程が、宗門内のいわゆる「開明派」と「守旧派」の対立という視角から検討されてきた。すなわち、高輪仏教大学は本願寺派の普通教校や文学寮の進取的・国際的な学風を受け継いでおり、いわば「開明派」が集う拠点でもあった。しかし宗門内の「守旧派」との対立によって廃止され、京都の仏教大学(龍谷大学の前身)に統合されることとなった。わずか2年で廃止されてしまったが、同校には前田慧雲、高楠順次郎、島地大等をはじめ、宗教哲学者の波多野精一、英文学者の上田敏など多彩な教員がおり、当時の仏教界にあって革新的な教育が行われていた。また同時代には前田慧雲による宗学近代化の動きもみられ、「近代真宗学」成立の原点を探る上でも重要な時期である。

一方で、高輪仏教大学は一派史や大学史に止まらない多様な側面を持っており、従来の研究においてはその多様性を捉えきれていない面がある。そこで本研究では本校の意義を問い直すべく、近代日本の教育政策と仏教の関係、他宗教との関係、さらに近代仏教研究の視点など、より広い領域から検討を行い、その成果を世界に向けて発信する。まず1年目は、高輪仏教大学の関係資料の収集、基礎資料となる『高輪学報』第1～26号(1901～1903年)の再検討からはじめたい。本研究は、将来、龍谷大学400年史を作成する上でも重要な成果になると確信している。

2年目

2年目は、とくに高輪仏教大学における仏教グローバル化の動向に着目する。高輪仏教大学が創設された明治35年、高楠順次郎ら同校の教員によって学内に「万国仏教青年連合会」が組織された。万国仏教青年連合会は、結成からその翌年にかけて国内外の仏教青年会と連合し、オーストラリア、香港、広東、ペナンなどに支部を開設し、英文と邦文で雑誌を発行するなど、グローバルな活動を展開した。また高輪仏教大学ではキリスト教の内村鑑三、アナーガリカ・ダルマパーラ(Anagarika Dharmapala)、ビルマの僧侶ダンマローカ(Dhammaloka)、インド人宗教者スワミ・ラム(Swami Rama)など、国内外の宗教者を招いて「宗教間対話」を行っていたことが明らかになり(IWATA Mami“Takanawa Bukkyō University and the International Buddhist Young Men’s Association: International Networks at the Turn of the Twentieth Century”*Japanese Religions*, vol.41, nos. 1 and 2, 2017)、近年、高輪仏教大学の存在は海外の研究者にも注目されるようになった。

また中西直樹・吉永進一著『仏教国際ネットワークの源流——海外宣教会（1888年～1893年）の光と影』（三人社、2015年）が刊行されたことにより、日本仏教の国際交流の先駆的役割を担った「海外宣教会」を中心とする明治20年代の仏教国際化の動きが解明されつつある。本研究では、本願寺派の普通教校で創設された「海外宣教会」の流れを組む「万国仏教青年連合会」の検討を通して、これまで未開拓であった明治30年代以降の**仏教国際ネットワーク**の解明につなげたいと考える。それはまた**本学のグローバル化の源流**を明らかにすることにもつながるであろう。

研究計画・方法／2018年度の研究目的を達成する計画・方法（シンポジウム・講演会・ワークショップ・セミナー・研究会・調査出張等）を総論と各論に分けて、具体的に記入してください。

〔総論〕

「高輪仏教大学の研究」では、大きく分けて以下の**三つの視点**から研究を行っていく。

- （1）高輪仏教大学の教員たちが**宗学近代化**の動きにどのように関わったのか、またそれは「**近代真宗学**」の形成にどのようにつながっていくのかを解明する。
- （2）**近代日本の教育政策と仏教**の関係に注目し、他宗派とも比較しながら、高輪仏教大学にはどのような特徴があったのかを明らかにする。
- （3）**近代仏教研究**の視点から、高輪仏教大学における**仏教の近代化、グローバル化**の動向について分析する。

本共同研究には、**真宗学・仏教学・仏教史・教育史・宗教学・社会学**を専門とする多様な分野の研究者が参加しており、**領域横断的に研究を行う**ことで、一宗派史・大学史に止まらない、高輪仏教大学のグローバルな広がりとその意義を明らかにしたい。

〔各論〕

まずは高輪仏教大学の関係資料の蒐集につとめる。とくに初年度は「高輪仏教大学の研究」の基礎資料となる同校が発行した『高輪学報』第1～26号（1901～1903年）の総目次の作成と分析を行う。そして、次年度以降の刊行を目指して、復刻『高輪学報』をはじめ、研究成果として『高輪仏教大学の研究（仮題）』、『万国仏教青年連合会と海外布教（仮題）』の出版に向けた準備を進める。

上記の〔総論〕の（1）については、六角仏教会奨学金（研究助成金）共同研究「近代真宗学」成立史の研究（代表：龍溪章雄）とも連携し、そこで得た新たな成果もアウトプットしながら進めていく。ここでは真宗学を専門とする教員らが中心となって、高輪仏教大学の教員を務めた前田慧雲らの思想を再検討する。また真宗大谷派の宗学近代化の動きとも比較しながら検討を進めていく。

（2）について、**近代日本の教育政策と仏教**の関係を取り上げた研究は、中西直樹『日本近代の仏教女子教育』（法蔵館、2000年）、谷川穰『明治前期の教育・教化・仏教』（思文閣出版、2008年）など未だ数少ないが、本研究には中西直樹（本学教授）や近代日本教育史が専門の谷川穰（京大准教授）が参加しており、明治30年代以降の展開を開拓するとともに、高輪仏教大学の位置づけを検討する。

（3）については、本学の**アジア仏教文化研究センター（BARC）**における（通時的研究班）ユニットB「近代日本仏教と国際社会」とも連携し、**国際シンポジウム**や**ワークショップ**の共同開催を検討している。高輪仏教大学の教員でキーパーソンの一人である**仏教学者の高楠順次郎**については、

近年、武蔵野大学において高楠の日記など**新出資料**を用いて「高楠順次郎の共同研究」（代表：石上和敬）が進められている。本研究には、その代表を務める石上和敬（武蔵野大学教授）も参加していることから共同で研究会を開催するなどし、高楠をはじめとする高輪仏教大学の教員らが**仏教の近代化やグローバル化**にどのように関わっていたのかを分析する。またキリスト教や神智学など**他宗教との関係**については、宗教学が専門の吉永進一（舞鶴高専教授）を中心に検討を進める。

2. 個人研究

申請者	氏名	金澤 豊	所属	文学部
			職名	実習助手
研究課題	日本語	自然災害時における仏教の実践的研究 災害の記憶をめぐる仏教者の役割を中心に		
	英語	Practical study of Buddhism after natural disaster The role of Buddhist in memory of disaster		

研究計画／研究期間の1年以内に何をどこまで明らかにする予定なのか明記してください。

(1) 研究目的

世界中で起こる自然災害。その被災者や遺族の苦悩は尽きることがない。苦悩の中でも精神的苦痛（広くスピリチュアルペイン）に対する仏教者の役割は徐々に研究が進められているが、本研究は災害の記憶の変容に注目し、そこに関わる仏教者の役割を明らかにするものである。

表象される災害の記憶は、慰霊碑やモニュメント、祭祀などあらゆる形へと変容する。その管理主体は国立のものから県、市町村単位、個人が設立するものまで様々である。2011年の東日本大震災から7年を経る現在、復興事業は生活再建に加えて、このような災害の記憶の保存継承が課題となっている。苦悩の表象化ともいべき災害モニュメントに仏教者はどう関わることのできるのか、忘却される災害の記憶に仏教の智慧や慈悲はいかなる効用を果たすのか。いま、本研究を遂行することで、今後世界中で起こりうる自然災害後の苦悩に対峙する仏教者の役割と教訓を残したい。

(2) 実施内容

本研究は、資料収集の基盤研究に加えて、国立復興祈念公園が建設中（2020年度に完成予定）の岩手県陸前高田市に焦点を絞り、1年以内に陸前高田市内の寺院を訪問する。寺院管理の追悼施設の有無や設置理由など聞き取り調査を実施する。そして、市内各所に存在するモニュメントの種類や災害7年間の変容などを調査し、災害を記憶する街のあり方を検証する。そのため年間2回、岩手県陸前高田市及び周辺市町村を訪問し、地域の図書館や、震災後のアーカイブを保存する地元新聞社（東海新報社）へ資料調査も併せて実施する。また、被災者や遺族の苦悩を受けて設置される国立復興祈念公園への地元住民の思いが複雑であることも想像される。地域住民の声に丁寧に耳を傾け、言いようのない気持ちを解きほぐすことをねらいとし、社会の困難を和らげることに資する研究を実施する。